
MIND COMPUTER

藤崎アオト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M I N D C O M P U T E R

【Nコード】

N 7 3 3 2 C

【作者名】

藤崎アオト

【あらすじ】

鉄臭い世界で生きる少年の話です。色んな人と出会い、別れ、成長していく主人公。

序章

暗い、暗い……。

どんな光さえも吸い込まれそうな闇が、街に広がっていた。

街灯すらない狭い路地、唯一の頼りである月は厚い雲に遮られ、本当の闇が辺りを包んでいた。

聞こえる音はない。

『無』という世界があるとすれば、まさにここだろう、と男は思った。

暗闇に目を慣らせば、細い路地の終わりに立っている事が分かる。背後は壁だった。

その壁は男の身長より約5倍以上の高さがあり、左右へも肉眼では確認できないほどに、どこまでも伸びている。

それは、壁ではなく塀と言った方が正しいのかもしれない。

男は見張り役だった。

頭の上にあげた夜行グラスを元の位置に戻すと、目の前の闇は一気に晴れた。

まるで昼のように、あたりの光景が目飛び込んでくる。

しかし、それでもそこにあるのは背後の塀と細い道。殺風景なビルの間だと感じさせられる場所だった。

次に男は背後の塀を見上げた。高い塀の更には、肉眼では見えないが赤外線センサーが張り巡らされ、この塀の近くは監視カメラがいくつも仕込まれている。誰が見ても進入は無理のように思えた。

だが、実際は何度かこの塀の向こう側へ侵入された事もあるらしい。

「おい、何やってるんだ？」

無音の世界に突然飛び込んできた声に、男は一瞬肩を震わせた。慌てて振り返れば、同じ夜行グラスをかけた男がすぐ後ろに立つ

ている。

「あ、いや」

「交代の時間だぞ」

「え？あ、ああ、そうか……」

男は時計を見て、もうこんな時間かと呟いた。どうやら、随分と長い時間堀を見上げていたようだ。

「しつかりしてくれよ、最近この辺も物騒だからな」

ぼんやりしていた男に、苦笑を含ませながら彼は言う。夜行グラスのせいで目は見えないが、唇の端が持ち上がるのを見た。

「ああ、悪い。じゃあ、後は頼む」

適当な返事を返しつつ、男は踵を返した。

そういえば、最近『石取り』をする輩が、この近辺も増えはじめたらしい。

堀の向こう側には、特殊な“石”があるとかで、それを売れば結構な金になるそうだ。

でも、この堀の向こう側へ行く方法なんてあるのだろうか。

特殊なIDでも持っていない限りは……。

男が様々な考えを巡らせている途中、後頭部に鈍い痛みを感じた。体が重力に逆らう事なく地面に落ちていく。

夜行グラスをしているのに、なぜか空が暗くなっていった。

「よし、作戦開始」

先ほど交代を申し出てきた、もう一人の見張りの男が合図を出すと、彼の他に数人の人影が現れる。

そして手際よく堀に向かって走ると、堀に埋め込まれた小さな穴とボタンを見つけ、そこにIDスティックを差し込んだ。

ボタンを押すと、大きな塀は縦に割れ、左右に広がる。壁の向こう側は、この路地の続きのようだった。

「タイムリミット、10分」

影はその奥にためらう事なく走っていく。

序章（後書き）

学生時代に考えた古いお話です。

しかも、主人公の名前を今のP・N・とかに使っています。色々と若気の至りだなあ〜とか思いながら、書き直しています。

つたない文章ですいません（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7332c/>

MIND COMPUTER

2011年1月20日01時17分発行